

# 方言の使用が話者の印象に及ぼす影響： 会話相手が使用することばとの関係

吉永 星瑠・村瀬 俊樹

## The effect of the use of dialect on the speaker's impressions: Relationship with the register used by the conversation partner

Seiru Yoshinaga & Toshiki Murase

### 要 旨

本研究は、互いに異なる方言を使用する話者間の会話場面において、会話の相手が方言（土佐方言）を使用する場合と共通語を使用する場合を設け、話者が出雲方言を使用する場合と共通語を使用する場合で、話者の印象がどのようになるのかを検討した。島根大学生 44 名が実験に参加し、相手も話者も共通語を話す場合、相手が共通語・話者が出雲方言を話す場合、相手が土佐方言・話者が共通語を話す場合、相手が土佐方言・話者が出雲方言を話す場合の 4 群に分かれて、話者に対する印象を評定した。その結果、出雲方言を話す話者は共通語を話す話者よりも、人柄が良いという印象を持たれ、対人的な魅力も高いが、知性については低く見積もられた印象を持たれる傾向があった。また、相手が土佐方言を話す場合に、出雲方言話者は共通語話者よりも人柄が良く、対人魅力があるが、知性を低く見積もられるという上記の傾向が見られ、相手が共通語を話す場合には、出雲方言話者と共通語話者の違いは小さかった。会話のダイナミクスにおいて、相手が心的距離を縮めようとすることに応じるかどうかという観点から、これらの印象形成のメカニズムが考察された。

【キーワード：方言，共通語，人柄，知性，会話のダイナミクス，心的距離】

私たちは、相手や状況に応じて使用することばを使い分けている。敬語はその代表であるが、相手が自分より目上であるかどうか、あるいは、相手との心的距離感などによって敬語を使うかどうかを決定している。このように、日本語という同じ言語であっても、相手や状況などによって使い分けられることばは言語変種と呼ばれる。

方言も言語変種の一つである。方言とは、共通語とは異なるものであり、地理的な差異が生み出す音韻・語彙・文法的な差異であると定義されるが（町・樋口・深田, 2006）、少なくとも地方出身者の多くは、方言と共通語を相手や状況などによって使い分けていると考えられる。

ところで、私たちは、人々と会話をする中で、その人に対する印象を形成している。人に対する印象は、その人の話す内容ばかりでなく、声の高さや話す速度、間の取り方など、その人の発することばのパラ言語的情報によっても変わって

る。また、話者が方言を話すか共通語を話すかによっても、その人の印象が変わってくる。本研究は、私たちが、方言話者に対してどのような印象を持つのかを、共通語話者に対する印象と比較して明らかにする。

方言話者に対する印象は、共通語話者に対する印象と比較した時、どのようなものなのだろうか。岡本（2001）は、質問紙を用いて、愛知県の大学生が、名古屋方言の話者に対して持つ印象を、共通語話者に対して持つ印象と比較検討した。その結果、男性話者に対しても女性話者に対しても、共通語話者の方が名古屋方言話者よりも、知性（知的な、冷静ななど）が高いという印象を持たれていた。一方、魅力（親切的な、暖かいなど）については結果は一貫せず、話者の出身地が明示されていない場合は、男性話者については方言話者と共通語話者に対する印象に違いは見られなかったが、女性話者については、共通語話者

の方が方言話者よりも魅力が高い印象を持たれていた。しかし、男性話者の出身地が名古屋市であり愛知県の大学に通っているということを明示した場合は、女性の被験者は方言話者に対しての方が共通語話者に対してよりも魅力が高いという印象を持っていた。

大阪方言話者と共通語話者に対する印象も検討されている。渡辺・唐沢（2013）は、東京大学の学生を対象として、大阪方言の話者に対する印象と共通語話者に対する印象を比較した。質問紙を用いた印象では、暖かさ（暖かい、親しみやすいなど）については、大阪方言話者に対しての方が共通語話者に対してよりも暖かいという印象を持っていたのに対し、知性（知的な、真面目ななど）に関しては、共通語話者に対しての方が大阪方言話者に対してよりも知性が高いという印象を持っていた。なお、渡辺・唐沢（2013）では、IATを用いて潜在的な態度も調べているが、潜在的な態度に関しては、共通語話者に対しての方が大阪方言話者に対してよりも評価が高いことを示している。

他の方言話者についてはどうだろうか。新見・丸目（2015）は、広島県内在住の女子大学生に、広島方言話者、鹿児島方言話者、共通語話者に対する印象を質問紙を用いて調べた。その結果、知性（知的な、礼儀正しいなど）に関しては共通語話者がいずれの方言話者よりも知性が高い印象を持たれていたのに対して、人柄の良さ（温かい、正直ななど）については、いずれの方言話者に対しても、共通語話者に対してよりも良い印象を持たれていた。

以上の研究の結果は、質問紙で調べた顕在的な態度に関しては、一貫して、共通語話者に対しての方が方言話者に対してよりも、知性が高いという印象を持つ傾向があることを示している。人柄に関する印象に関しては、すべての研究で一致しているわけではないが、おおむね、方言話者に対しての方が共通語話者に対してよりも、人柄が良いという印象を持つ傾向があるといえる。

これらの研究は、ある発話内容について、方言で話す人か共通語で話す人かを比較する形でなされたものであるが、方言が言語変種の一つであることを考えると、方言と共通語をどのように使い分けるかという観点から、その話者に対する印象を検討する必要がある。

町ら（2006）は、方言の場面による使い分けという観点からその使用者に対する印象を検討した。地元の道端で地元の親しい友人と話す場面（以下、友人場面とする）、東京で初対面の人に道を聞く場面（以下、初対面場面とする）の2場面を設定し、両場面とも共通語を使う人、両場面とも広島方言を使う人、友人場面では広島方言

を使い初対面場面では共通語を使う人、友人場面では共通語を使い初対面場面では広島方言を使う人という4人の人それぞれに対する印象を、広島県・香川県の大学生に対して質問紙を用いて調べた。その結果、知性に関しては、両場面とも共通語を使う人が最もその印象が高く、友人場面で広島方言を使い初対面場面で共通語を使う人がそれに次ぎ、両場面とも広島方言を使う人と、友人場面で共通語を使い初対面場面で広島方言を使う人は、もっとも知性が低いという印象を持たれていた。一方、人柄の良さについては、両場面とも広島方言を使う人、および、友人場面で広島方言を使い初対面場面で共通語を使う人が、両場面でも共通語を使う人や友人場面で共通語を使い初対面場面で広島方言を使う人よりも、良い印象がもたれていた。

町ら（2006）の研究は、共通語の使用が知性が高い印象を持たれること、方言の使用が人柄が良いという印象を持たれるという点で、上述の研究と同様の結果を示しているとともに、地元の親しい友人には方言を使用し、東京の初対面の人には共通語を使うという使い分けをしている人は、人柄が良く、知性についても比較的高いという印象を持たれるということを明らかにしている。

友人と初対面の人に対する使い分けの適切さという観点から、方言と共通語の使い方が話者の印象にどのような影響を与えるかは明らかにされたが、会話が、相手との言語的やり取りを通して、相手との関係を形成していくものであるという観点から方言の使用を捉え直すと、相手が方言を使うかどうかに合わせて自分も方言を使うかどうかということが問題となる。

共通語の使用が相手との間に一定の壁を築くのに対し、方言は逆にそのような垣根をとりはらい、相手との心的距離を縮める役割を果たすと考えられる（小林, 2004）。相手が共通語ではなく方言を話すということは、相手が自分に対して心的距離を近くに感じている、あるいは、心的距離を縮めたいというメッセージを発していると考えられる。一方、相手が自分に対して共通語を話しているならば、それは、相手が自分に対して一定の距離を感じている、あるいは、一定の距離を置きたいというメッセージを発していると考えられる。

大学のように、全国各地から人が集まり、様々な方言が話され得る場では、互いに理解可能なことばとして共通語を使おうという動機や、自分が使用する方言とは異なる方言を使う人に対して自分の方言を押し付けることは控えようという配慮から共通語の使用がなされることも考えられるが、友人関係が親密になってくると、使用することばも共通語から多少なりとも方言を含んだこと

ば遣いが変わってくることはあり得る話である。

このように考えると、相手が自らの方言使用で心的距離の近さを表明していることに対して、自分も相手の方言とは異なるが自らの方言で応えることは、自分も同様に心的距離が近いと感じていることを伝えているのに対して、自分は共通語で応えることは、自分は一定の距離を保とうとしていることを伝えることになっており、両者の印象は異なってくるのではないだろうか。

そこで、本研究は、出雲方言と土佐方言という互いに異なる方言を使用する2人の人物を設定し、相手が土佐方言を使用する場合、共通語を使用する場合のそれぞれに対して、話し手が出雲方言を使用する場合、共通語を使用する場合のそれぞれを設定し、話し手に対する印象がどのようになるのかを明らかにすることを目的とする。

## 方法

### 研究協力者

日本語を母語とする島根大学生44名が研究協力者であった。年齢は19歳～23歳で、平均年齢は20.6歳であった。

### 実験計画

話者の使用言語（出雲方言・共通語）×相手の使用言語（土佐方言・共通語）の要因計画で行った。いずれも研究協力者間要因であった。研究への依頼時には各群で人数が同数となるよう、ランダムに各群に振り分けて、オンラインでの回答の依頼を行ったが、回答があったのは、話者の使用言語が出雲方言で相手の使用言語が共通語である群が14名であり、他の3群の回答者はそれぞれ10名であった。

### 材料

**本実験での刺激** 親しい友人と久しぶりに偶然出会ったという会話の場面を設定した。一方は島根県出身者という設定で出雲方言または共通語を話し、もう一方は高知県出身者という設定で土佐方言または共通語を話すこととした。印象評定がなされる話者は島根県出身者の方、相手は高知県出身者の方とした。

町ら（2006）を参考に会話文をまず共通語で作成し、それを出雲方言のネイティブ話者が出雲方言に、土佐方言のネイティブ話者が土佐方言にそれぞれ変換した。以下に会話文を共通語で示す。印象評定される話者は「話者」、会話の相手は「相手」と表記する。（ ）内にイタリックで示したものは方言での会話文である。話者の方言は出雲方言、相手の方言は土佐方言である。

話者：ひさしぶり。今日も暑いね。元気してた？（ひさしぶり。今日も暑いが。まめなか

ね？）

相手：ひさしぶり。私は元気してるよ。そっちこそ、しばらく会わなかったけど元気してた？地元に帰ってたんだよね？（ひさしぶり。私は元気しちゅうよ。そっちこそ、しばらく会わなかったけど元気になった？地元に帰っちゃったがやる？）

話者：うん。私も元気してたよ。友達と海に出かけたり、家族とのんびり過ごしたりして。やっぱり実家って楽だよー。（うん。あたしも元気にしちゅうたよ。友達と海に行ったり、家族とおちらとやっちゃったわ。やっぱり実家は楽だわ。）

相手：そうだよー。ゆっくりできたみたいで良かったね。（そうやねえ。ゆっくりできたみたいで良かったねえ。）

話者：うん。ところで、今はどこかに行くところ？（そげだに。そーで、今はどこぞに行くところだ？）

相手：うん、大学の図書館に行こうと思って。今日中に返さないといけない本があるから。（大学の図書館に行こうと思ってよ。今日中に返さんといかん本があるき。）

話者：ふーん。でも大学の図書館なら、休日は早く閉まるんじゃない？（そげだ。そーだけど、大学の図書館なら、休みの日は早こと閉まーじゃない？）

相手：うん。だから、バスに乗ろうと思ってるの。大学まで遠いから、すごく面倒くさいな。（うん。やき、バスに乗ろうと思っちゅう。大学まで遠いき、しょうしんどいちゃ。）

話者：確かに、大変だね。バスなら、そろそろ時間じゃない？（ほんに、大変だわ。バスにのーなら、そろそろ時間だない？）

相手：ほんとだ、急がなくちゃ。それじゃあまた、今度遊ぼうね。（ほんまや、もう行かないかん。ほいたらまた、今度遊ぼうきね。）

話者：うん。久しぶりに会えてよかった。じゃあ、またね。（うん。ひさしぶりに会えてえかったわ。ほんなら、またね。）

出雲方言のネイティブ話者で共通語が話せる女性に話者の部分の原稿を出雲方言と共通語両方のバージョンで音読してもらった。また、土佐方言のネイティブ話者で共通語が話せる女性に相手の部分の原稿を土佐方言と共通語両方のバージョンで音読してもらった。つまり、話者についても相手についても、それぞれ同一の人物が方言のバージョンと共通語のバージョンを音読した。録音した音声とそれぞれの女性を表すイラスト画の静止画像を組み合わせ、話者共通語/相手共通語、話者共通語/相手土佐方言、話者出雲方言/相手



共通語、話者出雲方言／相手土佐方言という4パターンの刺激動画を作成した。

**方言の雰囲気をつかむための刺激** あらかじめ、出雲方言および土佐方言の単語やイントネーションを体験してもらうために、本実験の刺激の話者および相手とは別人であるという設定で、それぞれの方言での短い会話文を聞いてもらうことにした。出雲方言での会話文を以下に示す。土佐方言での会話文は同じ内容を土佐方言に変換したものである。それぞれの会話文は、それぞれの方言のネイティブ話者が音読した。

「はい、どげした?」、「もしもし、お母さん? あたしだけ。今ちょっこし電車が遅れちょーけん、帰るのおそーなるけんね。」、「あー、だんだん。気いつけだわ。」

「はー、勉強済んだ。ほんにたいぎなわー」、「ねえ今から食堂いかーや?」、「あ、ごめんよー。まだ課題が終わっちゃらんに。」、「ああそげかね。ほんなら、がんばーだわ」

「ゆうちゃんおはよー」、「ああ、あいちゃん。あがーん、髪切ったかね」、「今度面接があーけん、昨日切ってもらったわー」、「そげかねー、やーきがあーねえ。」

#### 印象評定項目

町ら (2006)、内田・北山 (2001) を参考として、19の印象評定形容語 (素直な、礼儀正しい、人に左右されない、信頼できる、社交的な、素朴な、知的な、積極的な、正直な、教養のある、自信がある、明るい、情にほだされる、親切な、冷静な、共感的な、温かい、真面目な、自己主張が強い) について、話者 (出雲方言または共通語を話す人) を表現するのにふさわしいかどうかを5件法で評定してもらった。

#### 対人魅力評定項目

話者が身の回りに実在する人物であったら、話者に対してどう思うかということに関する「知り合いになりたいと思う」、「一緒に働きたいと思う」、「人として好きになれそうだと思う」という3項目について、そう思うかどうかを5件法で評定してもらった。

#### 出雲方言への馴染み度

出雲方言への馴染み度を、聞く頻度と話す頻度から質問した。聞く頻度については、普段の生活の中で出雲方言を耳にするかどうかの質問に対して、「聞かない」、「たまに聞く」、「時々聞く」、「よく聞く」、「出雲弁がどんなものか分からない」から選択してもらった。話す頻度については、普段の生活の中で出雲方言を使用するかどうかの質問に対して、「使用しない」、「たまに使用する」、「時々使用する」、「よく使用する」、「出雲弁がど

んなものか分からない」から選択してもらった。

#### 手続き

調査は、Google フォームを用いて、オンラインで行った。実験協力に同意した人に対して、4つの群のいずれかの Google フォームの URL をランダムに送付して回答を依頼した。まず、出雲方言への馴染み度に関する質問をし、次に、方言の雰囲気をつかむための刺激を視聴してもらった。その後、本実験の刺激の会話場面を視聴してもらった。動画は何度視聴してもよいこととした。そして、話者についての印象を測る19の形容語に関する質問項目、および、話者についての対人魅力度を測る3つの質問項目に答えてもらった。

## 結果

#### 出雲方言への馴染み度

出雲方言を聞く頻度については、「出雲弁がどんなものか分からない」12名、「聞かない」3名、「たまに聞く」12名、「時々聞く」10名、「よく聞く」7名であった。出雲方言を使用する頻度については、「出雲弁がどんなものか分からない」12名、「使用しない」25名、「たまに使用する」1名、「時々使用する」4名、「よく使用する」2名であった。

#### 印象評定形容語の因子分析

印象評定に用いた形容語について、「ふさわしくない」を1点～「ふさわしい」を5点と得点化し、19項目を用いて、最尤法で因子分析を行った。共通性の低い項目を除外して因子分析を繰り返した結果、最終的に2因子解が適切であると判断された。プロマックス回転後の各因子に対する各項目の因子負荷量を表1に示した。

第1因子は、共感的な、温かいといった個人的親しみやすさや、信頼できる、正直なといった社会的望ましさを表す項目が高い因子負荷量を示しており、「人柄の良さ」の因子と命名した。第2因子は、知的な、真面目ななどの項目が高い因子負荷量を示しており、「知性」の因子と命名した。岡本 (2001)、町ら (2006)、渡辺・唐沢 (2013) においても「知性」は1つの因子として抽出されており、本研究でも同様の結果であった。本研究で抽出された「人柄の良さ」因子にあたる因子は、渡辺・唐沢 (2013) では1因子であるが、岡本 (2001) および町ら (2006) では複数の因子に分かれて抽出されている。このような違いはあるが、人柄に関する望ましさと知的な事柄に関する望ましさの因子が抽出された結果は、これらの研究と同様の結果であるといえる。

各因子に0.5以上の因子負荷量を表す項目について、信頼性係数 $\alpha$ を算出したところ、人柄の良さに関しては $\alpha = 0.91$ 、知性については $\alpha = 0.78$

表1. 印象評定 因子負荷量

	因子1	因子2	共通性
共感的な	0.91	-0.04	0.82
温かい	0.82	-0.19	0.72
親切的な	0.79	0.13	0.63
明るい	0.75	0.10	0.57
社交的な	0.74	-0.05	0.55
素直な	0.73	0.24	0.58
正直な	0.69	0.08	0.48
素朴な	0.65	-0.24	0.49
信頼できる	0.63	0.24	0.44
情にほだされる	0.58	-0.24	0.40
教養のある	0.06	0.85	0.73
知的な	-0.26	0.74	0.63
真面目な	0.19	0.69	0.51
礼儀正しい	0.27	0.60	0.42
冷静な	-0.29	0.51	0.36
因子寄与	5.65	2.69	
因子間相関		-0.05	

という高い値が得られた。そこで、これらの項目の平均値を算出し、それぞれ、人柄の良さ得点、知性得点とし、以下の分析に用いた。

#### 人柄の良さ

人柄の良さ得点について、話者の使用言語（出雲方言・共通語）×相手の使用言語（土佐方言・共通語）の2要因研究協力者間分散分析を行った結果、話者の使用言語に主効果の見られる傾向があり（ $F(1, 40) = 3.51, p < .10, \eta_p^2 = .08$ ）、出雲方言話者の方が共通語話者よりも人柄が良いという印象が高い傾向であった。相手の使用言語の主効果、話者の使用言語と相手の使用言語の交互作用は見られなかった（図1）。

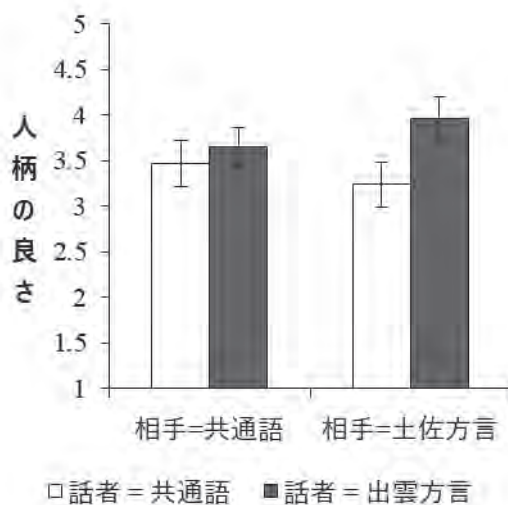


図1. 人柄の良さ得点（誤差棒は標準誤差）

相手が土佐方言を話している場合に限って、話者の使用言語による人柄の良さ得点の違いを調べたところ、話者が出雲方言を使用している方が、共通語を使用しているよりも人柄が良い印象を持たれていた（ $F(1, 18) = 5.74, p < .05$ ）。相手が共通語を話している場合は、話者の使用言語による違いは見られなかった。

#### 知性

知性得点について、話者の使用言語（出雲方言・共通語）×相手の使用言語（土佐方言・共通語）の2要因研究協力者間分散分析を行った結果、話者の使用言語（ $F(1, 40) = 7.96, p < .01, \eta_p^2 = .17$ ）、相手の使用言語（ $F(1, 40) = 6.74, p < .05, \eta_p^2 = .14$ ）に主効果が見られ、話者の使用言語が共通語の方が、また、相手の使用言語が土佐方言の方が、話者は知性が高い印象を持たれていた。また、話者の使用言語と相手の使用言語の交互作用が見られる傾向があり（ $F(1, 40) = 2.87, p < .10, \eta_p^2 = .07$ ）、単純主効果を調べたところ、話者が共通語の場合は、相手が土佐方言の時の方が相手が共通語の時よりも知性が高い印象を持たれていた。話者が出雲方言の時には相手の使用言語の単純主効果は見られなかった。また、相手が土佐方言の時は、話者が共通語の方が話者が出雲方言より知性が高い印象を持たれていた。相手が共通語の時は、話者の使用言語の単純主効果は見られなかった（図2）。以上の結果は、相手が方言で話している時に共通語で話している人に対して知性が高い印象を持つ傾向があることを示している。

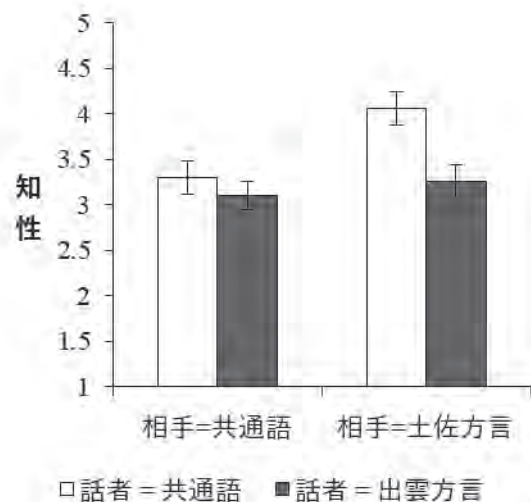


図2. 知性得点（誤差棒は標準誤差）

#### 対人魅力

対人魅力に関する3項目（「知り合いになりたいと思う」、「一緒に働きたいと思う」、「人として好きになれそうだと思う」）についても、「まったくそう思わない」を1点～「とてもそう思う」を

5点と得点化した。

3項目の信頼性係数 $\alpha$ は0.90と高いものであったので、この3項目の平均点を対人魅力得点として、話者の使用言語（出雲方言・共通語）×相手の使用言語（土佐方言・共通語）の2要因研究協力者間分散分析を行った。その結果、話者の使用言語の主効果が見られる傾向があり、 $(F(1, 40) = 2.99, p < .10, \eta_p^2 = .07)$ 、出雲方言話者の方が共通語話者よりも魅力が高い傾向があった（図3）。

相手が土佐方言を話している場合に限って、話者の使用言語による対人魅力得点の違いを調べたところ、話者が出雲方言を使用している方が、共通語を使用しているよりも対人魅力が高い傾向があった $(F(1, 18) = 3.28, p < .10)$ 。相手が共通語を話している場合は、話者の使用言語による違いは見られなかった。

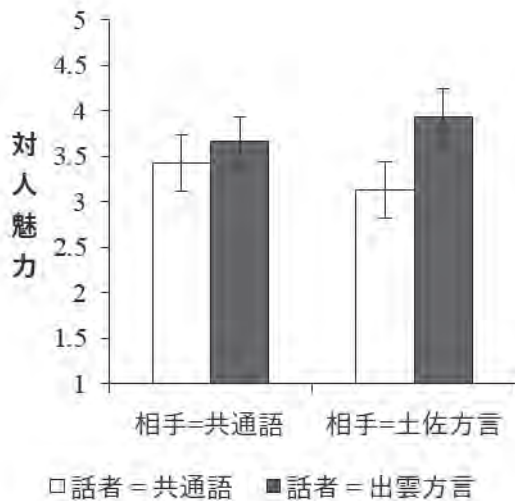


図3. 対人魅力得点 (誤差棒は標準誤差)

## 考 察

本研究では、人物に対する印象として、人柄の良さとは知性という2つの因子が抽出された。一般的に、人を認知する際、人柄の良さとは有能さという二次元から認知していると言われていたが（唐沢, 2017）、本研究の場合も、人柄の良さに関する因子と、有能さに関する知性の因子が抽出され、これまでの対人認知研究と同様の因子が抽出されたと言える。

それぞれの人物に対する印象については、相手が方言を使用しているか共通語を使用しているかを込みにした場合、出雲方言を使用している人物は、共通語を使用している人物よりも、人柄が良いという印象を持たれ、対人魅力が感じられる一方、知性は低いめであるという印象を持たれる傾向があった。この結果は、先行研究での他の方言使用者および共通語使用者に対する印象の結果と

一致しており、本研究は、出雲方言の場合も同じ傾向を示すことを明らかにしたと言える。

出雲方言話者と共通語話者に対する印象の違いは、どうして生まれたのだろうか。本研究では、話者の出身地を島根県と明示しているため、方言が人物の出身地の手がかりとなり、出身地に関するステレオタイプ的なイメージが印象に影響を与えているとは考えられない。他の研究でも見られているように、方言を使用するか、共通語を使用するかという言語変種の選択スタイルそのものが話者の印象に影響していると考えられる。

方言と共通語はどのように使い分けられるのだろうか。公的場面と私的場面を比較すると、共通語は公的場面で使われる傾向があり、方言は私的場面で使われる傾向がある（尾崎, 1992）。また、方言の使用は相手との心的距離を近いものとして表現するのに対して、共通語は相手と一定の距離を置いて表現するものと考えられる（小林, 2004）。このような方言と共通語の使い分けられ方があるならば、それを反映して、その話者に対しても、方言使用者の方が共通語話者よりも親しみなどの人柄の良さを感じやすい一方、共通語話者に対しては、冷静に行動するといった知性を感じやすいということが生じると考えられる。

加えて、本研究で、相手が自らの方言である土佐方言を使用している場合に、話者が出雲方言を使うか共通語を使うかによる違いが強まっていることを明らかにしたことは注目すべき結果である。すなわち、相手が土佐方言を使用している場合は、出雲方言を使用している話者は共通語を使用している話者よりも、人柄が良いという印象を持たれ、対人魅力を感じられるが、知性は低いめであるという印象を持たれていたが、その一方で、相手が共通語を使用している場合は、話者が出雲方言を使用しているか共通語を使用しているかによる違いは小さかった。これらのことは、会話のダイナミクスにおける言語変種の選択の仕方が話者の印象に影響を与えていることを示唆している。

互いに異なる方言を使用する話者どうしが会話をする場合、両者が理解可能な共通語で会話をすることがデフォルトとして考えられるとすると、相手が方言を使用するのに合わせて自分も方言を使用するのは、一種の収束が生じていると考えられる。収束とは、相手の話し方に近づくことである（岡本, 2010）。本研究では異なる方言を使用しているため、厳密な意味での収束ではないが、共通語に対して自分の生まれ育った地域の方言を使用しあうという点で、相手の話し方に近づくことを行っていると考えられる。また、友人関係において、相手が自らの方言を使用してくることは、話者に対して心的距離を近く感じているこ



と、あるいは、心的距離を縮めたいと思っていることを伝えるメッセージを発していることになる。それに対して、話者が自らの方言で応答することは、自分も相手との心的距離を近く感じている、あるいは、心的距離を縮めたいと思っている態度を応報的に返していることになる。したがって、相手が自らの方言を使用するのに応じて、自らの方言で応答する話者は、相手からの親密性を帯びたメッセージに応じて親密性を帯びたメッセージを表現する人として、人柄の良さを高く見積もられるのではないか。

一方で、話者が共通語で応答することは、収束を生じさせておらず、また、相手からの心的距離の近さのアピールには乗らず、相手との間で一定の距離を置こうとする態度を表出していると考えられる。したがって、相手が自らの方言を使用しているにもかかわらず共通語で応答する話者は、相手からのメッセージに含まれる親密性には応えない人として人柄の良さを低く見積もられ、共通語の持つ冷静で知性が高い印象を感じ取られるのではないだろうか。

相手が共通語を使用している場合は、異なる方言を話す人どうしのデフォルトとしての会話形態であるため、話者が方言を使うか共通語を使うかは、話者の印象にそれほど大きな影響を与えるわけではないのだろう。

このように、会話において相手の使用する言語変種に対してどのような言語変種で応答するかという会話のダイナミクスが、話者の印象に影響を与えているのではないかと考えられる。

本研究では、研究協力者の出身地は尋ねていないが、出雲方言の使用頻度から判断すると、出雲方言に馴染みのない人が研究協力者には多く含まれていたと思われる。方言の使用者に対する印象は、方言のネイティブ話者とノンネイティブ話者で異なる可能性があるため(町ら, 2006)、ネイティブ話者とノンネイティブ話者間の比較検討が必要であろう。また、方言の使用は世代によっても変動し、若者世代で方言の使用傾向が減少してきている。したがって、どの程度方言を使用するかということによっても、印象は変化するだろう。これらの点を明らかにすることが今後の課題としてはあるが、本研究は、方言使用者に対する印象形成の研究に対して、これまで取り上げられることのなかった出雲方言の使用者に対する印象を調べ、他の方言使用者の場合と同様の傾向を示すことを明らかにすることができた。また、出雲方言と土佐方言を使用する女性の大学生どうしという限定はあるが、会話における相手の発話への応答の観点から、方言使用者・共通語使用者に対する印象を明らかにした点で方言使用者・共通語使用者の印象に関して新しい視点を提供してい

る。今後、さらに、様々な方言使用者に関する印象を、様々な会話状況で検討し、方言と共通語という言語変種の使用による印象形成のメカニズムを明らかにすることが望まれる。

## 引用文献

- 唐沢かおり (2017). なぜ心を読みすぎるのか：みきわめと対人関係の心理学. 東京大学出版会：東京.
- 小林隆 (2004). アクセサリーとしての現代方言. *社会言語科学*, 7, 105-107.
- 町一誠・樋口匡貴・深田博己 (2006). 話し手の方言使用と印象：コードスイッチの適切さと聞き手の出身地による影響. *社会心理学研究*, 21, 173-186.
- 新見直子・丸目祐 (2015). 話し手の印象に及ぼす方言と参加者の出身地の影響. *対人コミュニケーション研究*, 3, 19-32.
- 岡本真一郎 (2001). 名古屋方言の使用が話し手の印象に及ぼす影響：Matched-guise technique を用いて. *社会言語科学*, 3, 4-16.
- 岡本真一郎 (2010). *ことばの社会心理学 [第4版]*. ナカニシヤ出版：京都.
- 尾崎喜光 (1992). 現代生活と方言：学校生活における方言と共通語の使い分け. *日本語学*, 11, 100-110.
- 内田由紀子・北山忍 (2001). 思いやり尺度の作成と妥当性の検討. *心理学研究*, 72, 275-282.
- 渡辺匠・唐沢かおり (2013). 共通語と大阪方言に対する顕在的・潜在的態度の検討. *心理学研究*, 84, 20-27.

## 付 記

本論文は、村瀬を指導教員とし、吉永が「リサーチインターンシップ」の授業で行った研究を村瀬がまとめ直したものである。